



翠巒 Mini Press 第162号 2019/8/21

編集・発行 高崎高校新聞部

紙面紹介

- 〈表面〉
 - ・高生に聞く
 - ・翠巒祭
- 〈裏面〉
 - ・先生に聞く
 - ・高前定期戦

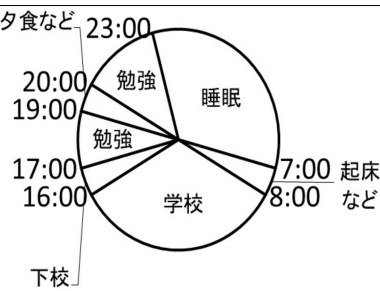
高生に聞く 受験勉強と高生生活

半年後に受験が迫っている中学生にとって、勉強への悩みはつきもの。また、勉強時間の配分も考えていかななくてはならない問題だ。そこで、後期入試への勉強法と部活と勉強の両立について後期入試首席の遠藤拓羽君（1の2）と陸上競技部でインターハイに出場した井上直紀君（1の7）に話を聞いた。

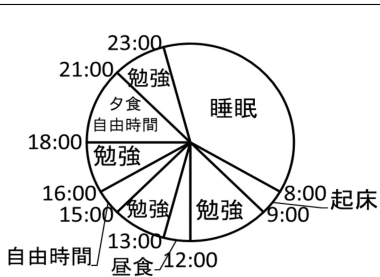
遠藤拓羽君



後期入試首席の遠藤君



受験期の平日の生活



受験期の休日の生活

井上直紀君

過去問題集で9年分問題を解いた。国語、理科、社会の記述問題と英文文の対策を重点的に行なった。

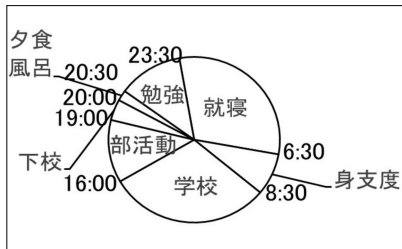
― 受験で注意すべきことは？
自分の力を過信しないこと。前期入試では多くの人が不合格となるので、それを想定して臨んでほしい。また、実力があっても万全な状態でなければ力を発揮できない。体調管理を徹底するべきだと思う。

― 受験生に伝えたいことは？
高崎高校（以下、高崎）では部活動や勉強などで充実した生活を送れる。部活動に入るなら、和太鼓部に入部してほしい。（小池）

― 高高を志望した理由は？
高崎の陸上競技部は、練習で自分自身で考えたことを実践できるからだ。

― 部活動と勉強の両立は？
部活動と勉強に、それぞれ平日に3時間費やしている。しかし、まだまだ両立できていないと感じる。

― 受験生にエールを。



入学後の井上君の生活

1年生に聞く 高生の魅力

高生には、多くの魅力がある。高生の1年生の意見をオンライン形式で紹介する。

〈学習面〉

- 1位 授業中の雰囲気が良い、授業に参加しやすい。
- 2位 平日の朝や土曜日にも補習があり、苦手な部分を克服できる。
- 3位 課題が大量に出るため勉強しなくてはならない状況を作ってくれる。
- 4位 授業では、ワークに載っていない解法や様々な表現方法を教えてくれる。
- 5位 自分が興味のある課題

〈生活面〉

- 1位 友人を作りやすい環境。
- 2位 靴下の柄や色が自由など、校則が中学校の時ほど厳しくない。
- 3位 女子がいないので、変に気を遣うこともなく、伸び伸びと生活できる。
- 4位 6月になると、Tシャツで生活できるようになり、とても快適に授業に臨める。
- 5位 様々な部活動があり、

翠巒祭実行委員長の田村君



実行委員長の田村君

高生の代表的な行事の1つに、今年で67回目を迎えた「翠巒祭」（すいらんさい）が挙げられる。毎年約1万5千人が訪れる県内有数の文化祭であり、実行委員会を中心に生徒主体でクラス展示や部活動展示、模擬店など様々な企画の運営を行なっている。それらを束ねる田村健人君（2の7）に話を聞いた。

「自分が所属している壁画班では、生徒全員が協力して造る巨大壁画の制作を行なっている。加えて、校門に造られるアーチの手伝いもするの（茂木）」

最後に、田村君は「厳しい受験を乗り越えた先には、楽しい高生生活が待っているのだから、高生に入学して、興味があれば、実行委員会に入って一緒に翠巒祭を盛り上げましょう」と受験生にメッセージを送った。（茂木）

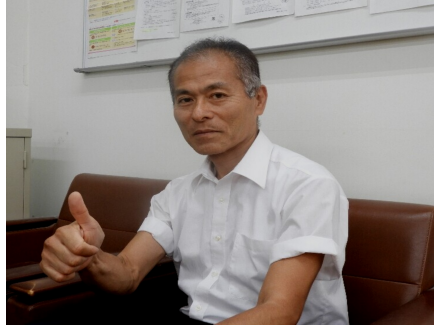
NOTE

「スタジオリ」。「誰も聞いたことのある日本のアニメーションスタジオリだ。1985年に設立され、「千と千尋の神隠し」や「火垂るの墓」などの数々の名作を生み出してきた▼宮崎駿氏が監督を務める「千と千尋の神隠し」は2001年7月20日に公開され、日本歴代興行収入第1位を記録するほどの大ヒットとなった。世界でも人気を博しており、中国では18年遅れで今年の6月21日に公開された▼宮崎駿氏の映画はあらゆる困難にぶつかって制作されてきた。描く絵コンテ（脚本のイメージをビジュアル化したもの）や原画（各カット元の絵）の量は莫大である上に、1つ1つの制作に時間がかかるため、毎日スタジオリは緊急した雰囲気にも包まれる。作業中、宮崎駿氏は何度も「面倒くさい」だ。やるが多すぎて、何もやりたくなくなるのだから。しかし、そう言いつつも彼は机に向かい作業を再開する。締め切りまで時間のない危機的状況の中、彼は「危機感が武器なんだよ」と言った。彼が今まで多く作ってきたのも、この気持ちがあったからだろう▼「受験」についても同じことが言える。受験までの道のりは非常に厳しく、「面倒くさい」、「やりたくない」と思うことが何度もあるかもしれない。そのときには、受験に打ち勝つための最大の武器として宮崎駿氏のような危機感を常に持つのはどうだろうか。（五十嵐）

高みの先生に聞く 高みを目指すためには

文武両道を掲げる高高に入学することは容易ではない。また、高高入学後に部活動や行事などと勉強とを両立することができず不安に感じる受検生も多いだろう。そこで1学年主任であり本校OBの竹内聡先生と、1学年英語科担当の森戸麻子先生に話を聞いた。

〈竹内聡先生〉



くさんいる。加えて、素直であり教員の言ったことを受け入れてやってみようという姿勢がある。やるべきことが多く苦しいことも多々あるが、生徒たちはよく頑張っている」と話した。

受検生が気になることの1つでもある「高高が求める生徒像」については、「高いレベルでの文武両道を目指そうとする者、また、勉強面でも運動面でも一段高いところを目指そうとする者は是非とも高高に入学してほしい」と語った。

他の高校との違いについて、「高いレベルでの文武両道を堅持している。高高は、日々の勉強はもちろんのこと、部活動や高前定期戦などの多彩な学校行事を通して人間としての幅を広げるのに適している」と語った。さらに、高生について、「文武両道を目指して努力している生徒がた

る」と述べた。最後に、竹内先生は受検生に向けて、「高高で仲間たちと共にお互いを高め合いながら充実した高校生活を送りたいなら、厳しい受検競争を勝ち抜いて入学してほしい」と語った。(青木)

〈森戸麻子先生〉



中学校と高校の英語の違いについて、まずは「細かい文法のルールを隅々まで覚える必要がある。中学校の時のように短時間で覚えようとしてはいけない」と積み重ねが大

事だと話した。一方で、中学校でも高校でも単語は勉強の土台となる。

「世界語」と言われる英語を使える人材が増えることはその国の国際的立場を高めることに繋がる。そのため、非英語圏の国々は英語教育に力を入れている。

日本の小学校では英語教科が必修となる。若いうちから英語を学ぶことで英語への興味、関心を高め、中学、高校での教育に繋げるといふ狙いがあるようだ。「EF(エデュケーションファースト)」が発表した非英語圏の国民の英語力平均を表す英語能力指

数では、日本は88ヶ国中49位であり、他の先進国に比べ大きく下回っている。では、海外の国々ほどのような教育をしているか。中国

ないだろう。例えば、オランダでは小学校の時から英語の教員資格を持つ教師が授業をしており、授業の質が高いと考えられる。

これからの英語教育

では小学校3年生、タイでは小学校1年生から英語教育が始まっている。しかし、他国と日本の英語教育の差は、単に教育を始める時期だけでは

また、英語圏で制作された子ども向けテレビ番組を吹き替えせずに字幕のみで放送するなど、社会全体で英語に触れる機会を作っているようだ。

英語が話せる人材が少ない日本において、これから求められるのは当然英語力である。今後は、会社の取引先に海外企業が増えたり、日本を訪れる外国人観光客が増えたりするなど、グローバル化はさらに進行すると思われる。それに対応するためには、英語力は必要な技能となるだろう。

(小池)

多くの人が単語の暗記方法で悩むだろう。「とにかく書いてたくさん読んでほしい。手や口を動かせば暗記効率も上がる。また、単語を見る回数を増やすことも暗記の効率UPに繋がる。集中して一気に単語を覚えようとするのではなく、毎日何度も目にするのが大切だ」と話した。

(鈴木)

社会人の体験を高校生で 高高新聞部紹介

高高では運動部だけでなく文化部も活発に活動している。なかでも新聞部は昨年、県新聞コンクール知事賞(最高賞)を受賞している。そこで部長の高橋泰造君(2の4)に話を聞いた。

「新聞部では、他の部活動で体験することのできない、社会に出た時に役に立つような活動をしている。例えば校内の先生や生徒、役所や企業などに取材の依頼をすることだ。さらに、記事を書くこと、写真を撮ること、芸能人や有名人にも取材できることなどである。

受検生に向けては、「今は受検を最優先にして頑張ってください。合格後どの部活動に入ろうか迷ったら、ぜひとも新聞部に見学に来てください。理科棟で一番部屋がきれいな文化部です。先輩方も優しいので気軽に入部できます。一緒に新聞を作ってみませんか」と笑顔で話した。(青木)

前高との伝統行事定期戦

高高は、「文武両道」を教育目標として掲げ、勉強だけでなく学校行事にも力を入れている。なかでも、通称「定期戦」と呼ばれる「高崎高校・前橋高校定期戦」は、両校がスポーツを通して競い合う1大イベントで、「翠巒祭」に並ぶ行事として挙げられる。進学実績でもしのぎを削る両校にとって、「定期戦」は絶対負けられない戦いとなる。「定期戦」は毎年9月に行なわれ、今年で73回目を迎える。会場は、高高と前高が毎年交互に担当し、今年前は前高で開催される。

「定期戦」は、運動部でない生徒も参加できる一般対抗と、各運動部で競い合う部対抗に分かれて行なわれる。勝敗は、一般対抗種目と部対抗種目のそれぞれの合計得点で



勝利のために綱を引く高生

競う。一般対抗は、水泳、綱引き、ソフトボール、駅伝、玉入れ、陸上競技、バスケットボール、バレーボール、ソフトテニス、フットテニス、卓球、長縄の計11種目がある。部対抗は、陸上競技、バスケットボール、バレーボール、ソフトテニス、卓球、硬式野球、軟式野球、剣道、柔道、空手道、弓道、テニス、サッカー、ラケット、バドミントンの計15種目がある。

高高は第70回大会から3連覇しており、令和最初の「定期戦」が開催される今年4連覇が期待される。昨年、一般対抗でバスケットボールに出場した2年生は、「前高に勝利できたので、夏休みの練習にしっかりと出席したい」と話した。

(高橋)